

彼岸の世界の橋

野 上 素 一

序

生きてる人間が、自分自ら直接に、あるいは、幻想により、死後の彼岸の世界を訪ね、そこでみたり、聞いたりしたことを報告する一種の彼岸の世界旅行記は、ギリシア・ローマ文學においてはそれほどには愛好されなかつたにしろ、中世キリスト教文學では重要な位置を占め、中世におけるこの主題の流行はダンテの時代にまでもちきたされた。「神曲」の中ではただ古い材料を蒸しかえすことに満足せず、種々獨特な創意をつけくわえているが、しかし洋々たる大河も、注ぎこむ支流によつて水量を豊富にしており、またそれぞれに異つた水源地から發した支流は、土地によつてさまざまに質の違つた土砂を搬びこむがごとく、「神曲」には東方起原のものとされる發想が數多く跡づけられる。

それ故いわば支流たる印度、ペルシアに根をもつ材料が、どの程度にダンテの「神曲」に見いだされるかを検討する手段の一つとして、東方文學では顯著な主題である「彼岸の世界の橋」をとりあげて、それが「神曲」の中に姿をあらわすか否かを考えてみたい。

一般の通説としては、この「橋」はダンテの「神曲」にあらわれないということになっているが（本論三参照）、私はそ

の考え方をいささか疑うものであることを先ずいつておく。

東洋、西洋を通じて、彼岸の世界の位置は、あるいは高い所、あるいは海の彼方、あるいは地下であると考えられ、それらの位置に従つて彼岸の世界の旅行記も、あるいは登行記、あるいは航海記、あるいは潜行記となつてゐるが、いまはその區別には觸れないでおこう。

一

さて今、私がその傳播のあとを追おうとしている「彼岸の世界の橋」が、さいしよに現われるのはペルシア文學の中である。

それによれば、死者の魂は死後三夜のあいだ、亡骸のそばに坐しているが、もしその人が生前に善行をなしていれば、この間に今まで感じたことのない悦びを感じ、三夜の終つたときに、南方から吹いてくるかくはしい風によつて、香木と草原のある樂園に住むべく生れ變つたことを知る。反對に、もしその人が生前に惡業を犯していれば、三夜のあいだ、いままで感じたことのない苦痛を感じ、三夜の終つたとき、北方から吹いてくる強風によつて、これから受ける怖ろしい應報を知らされるのである。そして善人の魂も、惡人の魂もひとしく一つの狭い橋のたもとに連れていかれる。これはマツダの神の作つたもので、キンヅアド橋 *Kinvata peretush* と呼ばれてゐる。

ここで「善い思想」「善い行い」「善い言葉」「善い宗教」の持主は、自分の良心の示現である一人の犬をつれた美しい乙女の手引きで、この橋の上み手の山上にある裁きの場所、*Haraberzaiti* に行き、生前の善行が神の眼前で證明されれば、ただちに黄金の椅子が興えられ、その國の住人となる。

そこへ行く善い魂の持主が渡る時には、橋は九本の檜を連ねたほどの餘り高くない高さとなり、幅も三本の矢を連ね

た、ほ、ど、充、分、廣、く、な、る、の、で、その上を安全に通行できる。これに反して悪い魂の持主が渡ろうとすると、橋幅が剃刀の刃、ほ、ど、狭、く、な、り、その者は途中で地獄に墜落する。

これはアヴェスタのキンヴァド橋で、このモティーフが文學にあらわれたのはこれが世界で最初のものである。

この種の橋はその後東方の幻想文學においては、後期ペルシア文學^⑤及びアラビア回教文學にみられる、またアラビアの「千一夜物語」^⑥にもあらわれる。しかしその後ユダヤ文學及びギリシア・ローマ文學の彼岸の世界には、不思議とこの橋はあらわれないが、中世アイルランド文學では（そこではすくなくとも初期には彼岸の世界は、多くの場合、西の海の彼方にあると考えられた^⑦）、九世紀の前半につくられたと推定されるメイルドゥインの旅行記^⑧ Voyage of Maelduin の中に橋の記事がみえる。この物語ではさまざまな島を訪問するが、それらの中に真鍮の扉のついた城塞の島があり、その島に上陸するためには一つの橋を渡らねばならない。それは硝子^⑨できていて、滑るので多くの人は海中に落ちると記されている。

次に「ダン・カウの本」Book of Dun Cow（十一世紀）及び「斑の本」Speckled Book（十二世紀）にも見られる九世紀頃の『アダムナンの幻想録』^⑩ Vision of Adamnain をとりあげよう。それによれば主人公なるフィス・アダムナン Fís Adamnain の魂は天使に抱かれて空中にまい上り、聖者の國と天國を訪問した後に地獄をみたと言っている。それは次のごとく描かれている。

『彼が足をふみ入れた最初の場所は黒く焼かれた土地であり、すっかり荒れはてていたが、そこでは苛責は行われていなかった。この土地の隣に一つの谷があり、谷の中には火が燃えていた。その火の焰は長くのびて、他の土地との境にまで及んでいた。谷の下の方は黒く、中ほどは赤く、上の方には石炭の火のような目をした八匹の蛇がいた。谷の上には巨大な橋がかかっていた。その橋の中央部は高く、そりかえつており、兩端は低かった。三人の仲間はその

橋を渡ろうとしたが、全部のものは渡りおえなかつた。ある一人が渡ろうとすると、橋ははじめから終りまで廣かつたので無事渡ることができた。次のものが渡ろうとすると、初めは大そう狭かつたが、終りは廣くなつて、努力の果てにやつと渡ることができた。しかし第三のものが渡ろうとすると、はじめは廣かつたが、終りは狭くなり、ついに途中から墜落して、下にいる赤く焼けただれた蛇の口の中に落ちこんでしまつた。

最初にくらぐらぐと渡つた人は純潔な、辛棒づよい、快活な人生を送つた人で、心から神を崇めた人であり、はじめ狭かつた橋が後に廣くなり、努力の果てに渡つた第二のものは、はじめ神の意志をあまり守らなかつたが、後に心を改めて神に奉仕した人であり、第三のはじめは橋が廣く、後には狭くなつたものは、神の言葉に耳をかたむけながらも、その後それを實行しなかつた人であつた。

無事に渡つたものが、對岸で發見したものは、連續的な苛責であつた。あたりは暗黒で、多くの力なく、弱々しいものが、ひしめきあつており、一時間苛責がつづくと、あとの一時間は休止された。』

次に『チャンの息子テグの冒険』^③ Adventures of Cian's Son Teigue の中には次の如き橋があらわれる。

『やがて彼が氷の川のところへ來ると、そこに細長い狭い橋がかかつていた。その上には石の棍棒をもつた一人の巨人の戦士がおり、その石の棒で齒を磨いていた。その名前はクルナン・クリアブサラチというのであつた。彼は直ちにその巨人と格闘し、その首をうしろにねじまげてしまつた。……』

次にファーマイ Fernoy の本にみ出される『ヘーの結婚』 The wooing of Ener の中にも一つの橋があらわれる。

一人のク・クラインなるものが航海して、獅子のような大きな獸のいる島や、その他の島を経めぐつたのち、一つの島につく。そこには原があつて、原の彼方には大きな谷があり、その中に一本の細い道がついていた。そこを通らねば、目指すスカタッチの家につくことができなかった。しかしこの道の兩側には彼を滅ぼすためにつかわされた、怪物が澤山い

た。次に彼は一つの急カーブの橋を渡らねばならなかった。その橋の二つの低い兩端は、もしその一方に誰かが足をのせると、向側の端がはね上つて轉倒させるのであつた。彼は三度試みて、三度失敗したのち、いきなり橋の中央部に飛びつき、橋の端が彼をはね落す暇を與えなかつたので成功した。かくして無事に島に上陸することができたのである。

次に『アルベリコの幻想録』^⑨ Vision of Alberico は多くの點で、ダンテの「神曲」に影響を與えたことで著名な十二世紀の物語である。この物語の主人公、モンテカシーノの神父アルベリコは、聖ビエトロと二人の天使の案内で地獄界、天堂界を訪問する。その中で地獄界では、棘のある木、焼けた鐵の梯子のある谷について、赤色の溶けた鑛物の谷をみた後に、焼けた歴青の川のところへきたが、その上には鐵の橋がかかつていた。正直な人の魂がその上を歩くとき、橋は廣くなり、渡ることも容易であつたが、不正直な人の魂が歩くときは、橋は途中から糸のごとく細くなり、下に墜落してしまふのであつた。

次に十二世紀中頃の（一一四九年と伝えられる）『ターンドルの幻想録』^⑩ Vision of Tundale には多くの異本があり、當時の歐洲にひろく知れわたつていたが、最初のものはラテン語で書かれ、その後イタリア語、ドイツ語、オランダ語、英語などで書かれるに至つた。

この物語の語り手、マルクス Marcus なる修道士の語るところによれば、カッシェル Cashel の騎士でターンドル Tundale という貴族が、ある時コーク Cork の友人を訪問し、食卓についているとき發作におそわれた。そして彼は死んだと考えられたが、體に溫みが残つていたので埋葬されなかつた。發作が起つたのは水曜の第四時であつたが、同じ週の土曜の同じ時間までつづいた。そして再び意識を取りもどしたとき、神に感謝してから、彼の魂が彼岸の旅行で見たことを次のようにマルクスに語つた。

『私の魂は天使に導かれ暗黒の道を歩いたが、そこで罪人がさまざまの苛責をうけているのを見た。やがて片側は硫黄

が燃え、他の側は雪に掩われた山のかたわらを歩き、深くて底のみえない暗黒の恐ろしい谷のかたわらに來た。谷底には苛責されている罪人のうめき聲と、流れる水音が聞えて、また惡臭を感じた。さて谷の上には千呎ほどの長さの板が橋渡してあつた。その幅は片足をのせられるだけで、心正しい人でなければ何人といえども渡れず、自分は多くのものが墜落するのを見た。しかし自分は天使に助けられて無事に渡ることができた。

やがて私は一つの廣い、暴風雨の吹いている湖をみた。その上には長さは二千呎、幅は掌ほどの橋がかかつていたが、それは鋭い鐵の釘でとめてあつた。湖中の怪物は橋の上を通る罪人の落ちるのを喰べようとして、橋の下にあつまつていた。この橋の上を、罪人は生前に盗んだものを擔いで通らねばならなかつた。私は牛を擔いで渡る者をみたが、その男は生前に牛を盗んだのであつた。私は渡りおえて、足が針のために血まみれになつてゐるのを天使に示した。……』

『ターンドルの幻想錄』には、彼岸の世界の橋を渡る僧侶に關しては『大グレゴリの對話』の影響をみいだすが、橋の狭さは今までになく誇張されている。それは『サニウルフの幻想錄』の影響であろう。ただ橋にうつた鐵の針ははじめて現われたものである。罪人を貪食する怪物は『聖ボールの幻想』の後の版を思い出させる。

アイルランドの幻想文學のなかで、『ターンドルの幻想錄』よりも一そうひろく知られてゐるものに、『聖パトリックの淨罪界の傳説』^⑧ Legend of St. Patrick's Purgatory がある。

この物語の主人公は騎士オウエン Owen である。彼は一一五三年に、聖パトリックの井戸を降つて彼岸の世界旅行を行つたが、その物語をラウズ Louth の修院長ギルバートからきいた、ハンチントンのドメニコ派の修道院の神父ヘンリ Henry of Saltrey は、十二世紀の半頃自らそれを書綴つた。このラテン語譯が數種あつて、ロージャ Roger of Wendover の『歴史詞華』 Flores historiarum や『金の傳説』 Legenda aurea やヴァンサン Vincent of Beauvais の『歴史の鑑』 Speculum

historiae などに採録されて世にひろまつた。

さて、オウエンはステイブン王 King Stephen の部下の騎士であつた。彼はさまざまの罪を犯した末、その贖ひのためにアイルランドに歸つてきたとき、聖パトリックの井戸が贖罪に役立つ話を思出して、ドニガル地方 County Donegal のダーク湖 Loch Derg のある島へ行き、その宗教的な建物を管理している修院長に頼んで、斷食と祈りをもつて充分準備した後、建物の中の井戸へ降りていつた。彼は惡魔がさまざまの苛責を罪人に加えるのをみた。また硫黄や溶けた鑛物の井戸には、罪人はそれぞれ深さを異にして漬けられているのをみた。やがて一つの高い山へ來ると、吹おろす風で裸體の罪人たちは冷たい川の中にたたきこまれていた。次に彼は深い火の井戸と廣い火の川をみた。そこにも怪物が澤山いた。その上に一條の橋がかかつていた。その橋は大そう狭くて滑りやすく、何人もその上に立つことができなかったし、また非常に高かつたので、下を見降す人は目まいを感じるほどであつた。オウエンは神の御名を稱えたので橋は廣くなり、無事に渡ることができた。對岸は天國で高い城壁と寶石をちりばめた門に守られていた。』

この『聖パトリックの淨罪界の傳説』には、これにも強く、『大グレゴリの對話』の影響がみられるが、橋の幅が廣くなるくだりは、『アダムナンの幻想錄』の方に一そう近い。わけても暗い小路、地下の路、山、火の川、火の井戸などの點でそれが感じられる。凍る川は火の川の變化と考えられる。

ロジャー Roger of Wendover に伝えられた一つの幻想錄^①がある。それは『ターチルの幻想錄』 Vision of Turchill である。一二〇六年のある日エセックス Essex のターチル Turchill of Tunsted は聖ジュリアンに聲をかけられた。そしてその聖者は彼に家に歸つて旅行の準備をするように勧めた。その夜彼が眠つていると、聖ジュリアンは彼を起し、肉體は寢臺に残して、魂のみを連れて世界の中心の方へ旅行に行き、一つの教會にはいつた。その中には聖ジュリアンを遣した聖ジェームスと聖ドミニウスが待つていた。それは彼岸の世界をみせるためであつた。死者の魂は一度はこの教會に集めら

れてから、淨罪界の火へ送られるのであつた。そこは聖母マリアのはからいで惡魔の襲撃から防ぐように作つてあつた。正しい人の魂は全部白であるが、北の壁の彼方には黒と白の斑點のある魂がいた。白點の多いものは壁に近く、斑點の多いものは壁から遠ざかつている。そのそばに地獄の井戸があり、その中からバラ色の煙がたちのぼつて、その男が生前に税を不當に支拂つたり、とつたりすることを示した。ターチルは不當な税のとり方をしたので、煙にむせて二度咳をした。後で調べると、寢臺に残して來た彼の肉體も二度咳をしたそうである。

二つの壁の間、その教會の東には淨罪界の火が燃えていた。その先に冷い鹽の湖があり、その上に棘のある橋があり、斑點のある魂は生前に犯した罪の割合で、あるいは長く、あるいは短くその火の中に留らねばならず、その後でさまざまの深さで湖の中に漬けられる。次に彼らはその橋を渡らねばならない。しかし橋上を歩くとき犯した罪や慈愛の大小により、また彌撒によつて與えられた保護の大小により、あるいは速く、あるいは遅くなつた。つまり生前の行いによつて、橋上の棘によつて受ける被害がちがうからである。

到着した對岸は悦びの山で、そこには全世界の住民を入れうるほど大きな教會があつた。

以上はすべてアイルランドのものであるが、次にノルウェーの幻想文學を覗いて見よう。

十三世紀の初めの『オラフ・エステソンの幻想錄』^⑩ Vision of Olav Åsteson では、同じ名の主人公がクリスマスの前夜から翌年一月六日まで眠りつづけ、その間に一つの幻想をみた。

彼は雲の上に登るかと思うと、低く波間を飛び、聖なる海や、谷を越えた。しかし河の水は地下を流れていたの、見ることができなかつた。彼は犬をつれ、馬に跨つて飛んだ。彼の赤い色の衣服はぼろぼろになつた。やがて狭い環をくぐり抜けるとき、肉體は留り、魂だけが飛びつづけた。やがて彼はジャラー橋 Gjallar bridge へきた。それは空中に高く聳え、赤金の柱で保強されていた。橋は一匹の蛇、一匹の犬、一匹の牡牛によつて守られていたが、オラフは構わず橋を渡

つた。橋には一列に鋭い針がでていた。橋を渡り終ると一つの美しい國についた。

『大グレゴリオの對話』は早くから知れわたり、古代ノルウェー語にも翻譯されていたため、その中の「死の橋」がノルウェーの文學にも強い影響を与えたことが想像されるが、ジャラー橋の話は、その翻譯以前であるから、それと直接の關係があつたかどうかは斷定されないであろう。

二

さて印度、ペルシアなどの東方文學が西歐に傳播するにいたつた歴史的背景の細かい分析は、ページの關係上ここでは省略を餘儀なくされるが、この推進には、四世紀のペルシアのサッサン王朝の勢威と、コンスタンティノールを中心とするビザンティン帝國の繁榮があつたことがあつたことは明瞭である。

しかし傳播の經路ははなはだ複雑で、ケルト族のアイerland文學に直接に影響を及ぼした、いわば北廻りの經路と、一旦南歐の中世文學に影響を與えて、それが更にアイerland・ノルウェー一帯の北歐文學へ影響を與えてから南下してイタリアや、南フランスなどの南歐文學へ影響を與えた、いわゆる南廻りの經路とがある。この南廻りの經路による東方文學の影響の結果として、「彼岸の世界の橋」のモチーフを中世文學にまつ先きに示しているのは、『大グレゴリオの對話』The dialogue of Gregory the greatである。

この物語は六世紀につくられたものであるが、その與えた影響は甚大で、先きに述べたのアイerland文學、ノルウェー文學がそれに根をひいているのはもとより、聖フラチエスコやダンテの作品にまで強い影響を見ることが出来る。

さてこの物語の中で、「彼岸の世界の橋」に關する部分を拔萃すると次の如くである。

コンスタンティノールに住んでいた、ステイブンなるものが、死んだが未だ埋葬されなかつたとき、彼の魂は地獄

の土牢へと連れさられた。しかし悪魔は、死ぬべきはこのステイブンでなく、ステイブン・スミスなる者だというので、彼の魂はもとの肉體にかえされ、その代り、ステイブン・スミスが死んだ。また三年後に、兵士であつた彼は死にかかり、一度肉體をはなれた彼の魂は、再び世に戻ることができた。そして彼はそのあいだに見たりきいたりしたことを話した。一つの橋があり、その下を川が黒い煙をたて、悪臭を發つしながら流れているが、對岸には楽しい緑の野原があつて、匂いのよい花が咲き、多くの人が群れている樂園があつた。また多くの建物が光り輝いており、なかでも金の煉瓦でできた一きわ美しい家があるが、それは誰のものか知らない、などと語つた。

また川の堤の上にはいくらかの家がならび、そのあるものは川からの悪臭に包まれているが、全然そうでない家もあつた。

さて上述の橋を渡ろうと欲するものは、まず次のような有様になる。即ち惡しき者が渡ろうとすれば、黒い惡臭の川へと墜落する。しかし正しく罪のけがれないものは、容易に渡りおえて、樂園に入ることができる。彼は一人の僧侶が樂に渡るのをみたが、ステイブンは足を滑らせて、からだの半分は橋の際から外へぶらさがつた。その時數名の恐ろしい人がきて、彼を川へつき落そうとしたが、同時にまた數名の白い美しい人がやつてきて、彼を助け起そうとした。その橋はまづすぐ進めば永遠の生活に辿りつき、惡臭を發つする川は惡徳を示すことを教えている。

この橋の序述^⑩は、まえに列舉した例についてもわかる通り、東方の文學の影響を明白に證據だてるが、ただこれもしばしば引例した物語にあつたごとく、渡る者が「惡しき者」とか「善き者」とかによつて廣くなつたり、狭くなつたりすることや、またその他の形態の敘述が見られない。しかし紛失して今日まで傳つていない古いマヌスクリプトでは、おそらくそれ等にも觸れていたであろう。というのは、「大グレゴリの對話」から派生した第四版の「聖ボールの幻想録」には、それがあらわれているからである。

元來『聖ボールの幻想録』The vision of Saint Paulはそのギリシア語の文體から判ずると、三世紀の作で、聖アウグスチヌスには非難されが、ダンテには利用され、またチョーサには親しまれた。六世紀の初め頃から九世紀にかけて多くのラテン語版が生れたが、その中でも第四版がもつとも普及し、今日も二十七卷の形で残っている。

さて『聖ボールの幻想録』では、天使に導かれた聖ボールが、罪人たちが苛責をうけている場所を訪れる。そこから天國へ行く途中に四つの川と、根元から川の涌きだす一本の木、善と惡の知識の木、生命の木などがあるのをみるが、九世紀にできた第四版には、この部分に川のところに、火の車とならんで橋の記事が見いだされる。

この第四版にみられる天國への登行、川、生命の木などのモティーフを含む敘述の大部分は、ヘブライ及びキリスト教文學の傳統をうけついでおり、火の車と橋はそれ以外の文學に根源をもつのである。(因に火の車は『聖ペテロの默示録』および『シビリの豫言』にもあらわれる。)

『サニウルフの幻想録』Vision of Suniulfは、ランドゥ Randau の修院長サニウルフのみた幻想で、六世紀頃、グレゴリ Gregory of Tours によつて書かれた「フランク史」Historia Francorum の一章をなす物語である。それによると、サニウルフは一つの火の川のほとりに連れていかれたが、みると多くのものが岸邊に蜜蜂のようにかたまつていた。やがてかれらは、あるいは腰まで、あるいは腕のつけ根まで、あるいは顎までその川に漬けられるのであつた。その川の上には一條の橋がかかつていた。それは大、小、狭、く、やつと片足をのせうるだけであつた。對岸には大きな白い家があつた。サニウルフがこの橋の意味を訊ねると、信者たちに戒律を守らせるのに不熱心な僧侶は橋から落ち、嚴格なるものは無事に渡つてその家にたどりつく、と説明されたということである。

この『サニウルフの幻想録』の中にわれわれは『大グレゴリの對話』には見あたらなかつた原始的要素を發見する。そして『大グレゴリの對話』には火の川とはつきり明言せず、それを暗示する言葉のみであつたが、『サニウルフの幻想』

にはそれが明示され、橋の幅が狭いことも、罪人が川に漬けられている敘述も詳らかである。

これによつて『聖ボールの幻想録』の第四版の作者は、『大グレゴリの對話』の古いマヌスクリプトから材料をえたのみならず——地獄の建物と罪人の密集のごとき——またトウールのグレゴリの作『サニウルフの幻想録』をも知つていたことが推定される。そうでなければ、それらの要素を含んでこの幻想録を誘いだした源泉になるものがあつたに違いない。次にダンテの「神曲」に少からざる示唆を與えたイタリアの中世文學、聖フランチェスコ（一二八二—一二三六）の「小さい花」^⑧ Fioretti 中の「三人の強盜が改心して聖フランチェスコの修道會の修道士になつたこと、及びその一人が不思議な幻想を見たこと」“Come Santo Francesco converti tre ladroni micidiali, e fecionsi Frati; e della nobilissima visione, che vide l'uno di loro, il quale fu santissimo Frate.”を檢討してみよう。

この物語はもとは強盜であつた一人の男が、改心して聖フランチェスコの修道會に入り、聖者の死後も精進にいそしんでいた間にみた幻想録で、次のような内容をもつてゐる。

『ある夜のことである、朝の勤行の後、彼は睡魔にうちまけて、どうしても眠りをしりぞけて、いつものようにめざめてゐることができなかつた。それ故、眠ろうと床の上に身をよこたえた。しかし頭を下におろすやいなや、彼の魂は體をはなれ、大そう高い山の上につれていかれた。その山のそばには、深い淵があり、ところどころには割目やさけ目のある岩がそびえていた。その深い淵はのぞきこむだけでも怖ろしかつた。ところが、彼をつれてきた天使は彼をその中につき落した。彼は崖から崖へ、岩から岩へとはねとばされて、とうとう淵の底におちて、こなごなに碎かれたような氣がした。彼がそのような目にあつて倒れてゐると、彼の連れの天使は云つた。『立ちなさい。お前はまだ遠い道をいかねばならないのだ。』と。そこで彼は答えた。『あなたは、わからない方でございます。私が落ちてこんなにひどい怪我をして、死にかけてゐるのを見ながら、立てと仰しやるのですから。』そこで天使は彼のそばへきて、ちよつとさわつただけで、手足

をもとどおりに治した。

それから、天使は光つた石や、茨や、棘のある木の群らがつたひろい野はらを示して、その野の果てまで裸足で歩かねばならないといった。男が苦しいのを忍んで、野の果てまであるくと、天使はいった。『さあ、この爐の中にはいりなさい。こうせねばならないから。』そこで彼は答えた。『ああ、あなたはなんという残酷な案内者でございましょう。野原でうけた苦みのために死にそうになつてゐるのを見ながら、こんどは爐にはいれとおつしやるのですから』しかし見まわすと、爐のまわりには熊手をもつた悪魔がいて、かれらは熊手で彼を爐の中におしこんだ。

爐にはいると、そこに一人の男がいたが、みると、彼の代父であつた。彼も火で焼かれていた。そこで、その男にいつた。『氣の毒な代父さん。あなたはどうして、ここへ來たのですか。』男は答えた。『もう少し先へいきなさい。お前の代母である私の妻がいるから、われわれが滅亡^{めいびつ}におちたわけを話すだろうよ。』そこで先へいくと、代母がいた。彼女は火でできた樹のなかに、とじこめられて、全身が火そのもののように熱くなつていた。

彼は訊ねた。『お氣な毒な代母さん。なぜあなたは、このような責苦をうけねばならないのですか。』彼女は答えた。

『聖フランチェスコ様が豫言された大飢饉のとき、私の主人と私は樹目をごまかして、小麥や穀物を賣つたからです。それで私は樹に入れられて焼かれるのです。』

この言葉ののち、彼の案内役の天使は、彼を爐からつき出して『お前はまだ怖ろしい旅をつづけねばならないから、仕度をしなさい。』といった。

その人は答えていつた。『無情な案内人さん。あなたは私に同情してくださいさらないのですね。このとおり爐の中で、殆んど焼けてしまつたのに、あなたは私をつれて怖ろしい道をいくのですか。』すると天使は彼にふれて、もとの體になおした。

それから、天使は彼をつれて、一つの橋のところへ來たが、それは大きな危険をおかさねば、わたることができなかった。なぜならば、橋は大そう弱く、狭く、また滑りやすく、兩側には欄干もなかったから。しかも下には激流がほとばしり、いやらしい惡臭をはなつ蛇や蝸がたくさんいたから。しかし天使は次のように云つた。

『この橋を渡りなさい。お前はどうしても、渡らねばならないのだから。』男は答えた。『私にどうして、これが渡れましょう。渡ればきつと怖ろしい川の中へ落ちてしまいますよ。』

天使はいつた。『私についてきなさい。私が足をおろすところをみて、足をおろすがよい。そうすれば、無事に渡れるだろう。』そこでこの男は天使のあとについて、橋の中央まできた。そこから天使は飛去つて、彼をはなれ、橋のむこうの大そう高い山の上に飛あがつた。この男は天使が飛んでいったところをよく見さだめておいた。

しかし、いま案内者なしに取りのこされて下をみると、あの怖ろしい動物が水から頭を出し、口を開けて、彼が落ちたら呑もうとまつているのに氣がついた。彼はこわくなり、どうしたらよいか、どう云つたらよいか分らなくなつた。なぜなら、前にも後にも進むことができなかったからである。このような窮地におちいつては、唯一の頼みは天主であることを知つたので、彼は坐つて橋を抱き、心から涙をながし、天主に身をゆだね、慈悲ぶかいお情によつて、助けに來て下さいと祈つた。

祈が終ると、彼はだんだん翼がはえてくるような氣持がした。そこで悦びながら、橋のむこうの、天使が飛んでいったところまで飛べるだけの翼が生えるのを待つた。しばらくすると、なんとしても橋をはなれたい思いにもえて、飛びたとうとしたが、翼が充分に生えていなかったので、彼は橋の上に落ち、翼も抜けてしまつた。そこで彼は、初めのように橋にすがりつき、天主に身をゆだねた。すると祈りののちに、もう一度翼がはえてくるのを感じたが、やはり前と同じく、伸びてくるのを待てず、早目に飛ぼうとして橋の上に落ちた。ここで彼も、落ちたのは性急に飛ぼうとしたためであるこ

とをさとり獨言をいつた。『今後もし翼がはえたなら、飛べるまで大きくなるを待とう。』

こう考えていると、翼が三度目に生えてくるのが感じられ、今度はそれが充分大きくなるまで長く待った。彼は百五十年も待った気がした。

ついに彼は立ちあがつて、力のかぎり三度目の飛行をこころみ、宙に飛びあがつて天使の飛んでいつた同じ場所へいつた。そして彼が天使のはいつた宮殿の門を叩くと、門番が『そこへきたお前は誰か。』と訊ねた。……

この物語には、中世文學にしばしばあらわれる石塊と棘の木のある野原があらわれるが、又『聖パトリックの淨罪界の傳説』や「大グレゴリオの對話」にみられる「橋」があらわれ、さらに新らしく翼のモチーフまでつけ加えられた。

次にダンテ以後の作家の作品中、「彼岸の世界の橋」があらわれるものとしては、聖カテリナ Santa Caterina di Siena (一三四七—八〇)の「神の原理の書」^⑤ Libro della Divina Dottorina があるが、そこには川と橋があらわれ、川は暗い生活への誘惑であり、橋は聖なる言葉の化身として高く聳えるが、人生と離れてはいない。そのまわりに城壁が周らされ、三段の階段が刻まれている。それはそれぞれに不完全な愛、完全な愛、子としての愛を象徴する。橋にのぼつて進めば永遠の生命に到達できるが、罪人たちは橋の下を歩き、岸邊に憩い、また川の底に沈むものもある。

批評家は聖カテリナの「橋」は十二世紀の作家「聖ガルガーノの幻想録」^⑥ Vision of Saint Galgano の影響をうよく受けていることを指摘している。

「聖ガルガーノ (一一八一年歿) は十二世紀末にこのマヌスクリプトを作成したと想像されるが、それによると、一人の天使がこの聖者にあらわれ、『自分について来るように』といった。聖ガルガーノは敬虔な氣持でついで行くと、川があり一つの橋がかかつていた。

この橋はたいそう長く、大きな努力なしには渡ることがむづかしかった。橋の下には水車があり、廻りつづけていた。

それは地上的なものは流轉することを象徴していた。聖ガルガーノは無事に渡りおえて悦びの原についた。

この「橋」は從來の傳統的なモティーフを踏襲するほか、水車がついていることは、「シビラの豫言」「聖ベテロの黙示録」「聖ポーロの幻想録」の火の車を想起させる。

この主題と直接関係はないが、「橋」と密接な関係をもつモティーフとしては、川のモティーフで、それは「ペーラックの黙示録」Apocalypse of Baruch「クルプスの牧人」Shepherd of Hermas「聖ボールの幻想録」Vision of Saint Paul「大グレゴリの對話」Dialogue of Gregory（この川は黒煙をあげている）「ゴデシャルクの幻想録」Vision of Godeschalc（この川には短刀が植つている。）などにあらわれる。川の中でもそれが火の川であるものは、「シビラの豫言」Sibylline Oracles「エズドラの幻想録」Visio Esdrae「聖ベテロの黙示録」Apocalypse of Peter「聖ボールの幻想録」Vision of Saint Paul「サニウフの幻想録」Vision of Suniulf「アダマンの幻想録」Vision of Adamann「アルベリックの幻想録」Vision of Alberic「聖バトリックの淨罪界の傳説」Legend of St. Patrick's Purgatory などである。

さらに「エズドラの幻想録」と「聖ボールの幻想録」の第四版には火の川とともに「橋」があらわれる。「橋」のモティーフでも聖フランチェスコの「小さい花」や「聖ガルガーノの幻想録」では川の中の怪物をとまなう。

さらに「ターンデルの幻想録」Vision of Tundale では橋は二つあり、湖上の橋には鋭い針がうつっている。「オラフ・エステンソンの幻想録」のジャラル橋にも一列にうつた針がみられる。「橋」のモティーフに附随したモティーフとしては暗い谷があつて、多くの幻想録にあらわれる。そこには聖書の詩篇の「死の影の谷」（イザヤ書・第九章・二）の影響がみられる。さて本題に戻つて、「彼岸の世界の橋」のモティーフは以上列挙した幻想文學の中の、いかなる場所にあらわれるであろうか。即ちそれらの文學の中のこの「橋」の位置を問題としてみようと思う。

それはあるときは、地獄界と天堂界の分岐點に（アヴェスタ）、また海と城塞の間に、（メルドゥインの旅行記）、地獄の旅行の

終點で天堂界の直前に（アダムナンの幼想録、聖パトリックの淨罪界の傳説、聖フランチェスコの小さい花等）、地獄界の中央に（アルベリコの幻想、ターンデルの幻想録）という風で、あり場所は一定していなくとも、天堂または淨罪界の入口になつてゐる點で、それはまたもつとも合理的というべく、後期の幻想物語においてもこの位置が守られてゐる。

次に注意すべきことは、「聖パトリックの淨罪界の傳説」という表題をもつてゐる書物がその内容は地獄界の記述であることから、容易にわかる通り、中世までは地獄界と淨罪界の區別があいまいで、罪人が苛責されてゐる場所は、および淨罪界とよばれてゐたが、その一部には地獄の井戸があつて、その中では一段と重い罪人が、一段と重い刑罰に處せられてゐると考えられてゐた。

地獄界と淨罪界をはつきり二つの世界に區別したのは、ダンテが最初で、これは「神曲」のもつとも著しい特色である。それ故彼以前の文學では、淨罪界と書いてあつても、苛責の種類から判斷して、地獄界と解釋してもあやまりではなく、またダンテの場合、淨罪界という名を用いてゐても、地獄界と區別して考えねばならない。

三

以上の例が示すごとく、多少の變化と修飾が加えられているとはいへ、東方の文學にみられた「彼岸の世界の橋」の投影は、アイランド文學や南歐の中世文學には明らかに發見できるが、果してダンテの「神曲」にもそれが辿られるか否かについては、多くの學者間に今日まだ意見の一致を見ない。

たとえば、最近のすぐれたダンテ研究家、フランチェスコ・トラッカ Francesco Toracca が、その論文「神曲の先驅者」 *I precursori della Divina Commedia* の中で、「彼岸の世界の橋」についてでなく、一般にダンテの獨想性について、語つた言葉の中に『幻想は當時數多く語られ、あまねく知られてゐたから、ダンテが知らぬはずはなく、特に欲しくなくとも、

そのうちのどれかを取上げて、利用せざるをえなかったのだ。』*Le visioni erano numerosissime, divulgatissime, popolarissime: è impossibile che Dante non le conoscesse e che, perciò, anche senza volerlo, qualche cosa non ne prendesse e adoperasse. c'è.*

また彼は言う。『あるドイツの學者が、當時知られていた幻想を数えたところが、四十以上あつたと報告しているが、それは三世紀から十二世紀までの約千年間に、歐洲の約半分の地域で、一世紀に約四つの幻想が生産されたわけである』
といい、その中でも「ターンデルの幻想錄」「アルベリコの幻想錄」「聖パトリックの淨罪界の傳説」が著名であるが、この最後のもののみがイタリアに浸透していたと述べている。

なお彼は云う『私の意見を、みなさんはあまり極端だと思ふかもしれないが、たとへダンテが何かを、何か小さなものを、幻想から引きだしたとしても、その作家をダンテの先驅者だと言ふことには我慢できない。』*Le mie opinioni vi apparanno, forse troppo assoluto, troppo precise. Ma se anche ammettessi che qualche cosa—assai piccola cosa!—Dante potè dedurre dalle visioni, non potrei rassegnarmi chiamare precursori di lui gli autori di quelle.*

トラッカの如き極端な説き方はしばらく措き、別の文學研究家ニコラ・ジンガレリ *Nicola Zingarelli* の説に耳を傾けよう。彼はその名著「イタリア文學史」*Storia letteraria d'Italia* の中で次のようにいつている。

『アイルランドは地獄の恐怖を夢みる僧侶たちの眞の祖國であつたから、われわれに最も重要な幻想を呈供してくれる。その第一のものは、最もよく知られている「聖パトリックの淨罪界の傳説」で、その三・四の版はイタリアにおいても出ている……中略……神は聖パトリックに對して、信仰を廣めるのに役立つようにと淨罪界に通じる一つの井戸を教えた。その中にはいつた人は、ほかにあつたが、騎士オウエンもその中に入ることを望んだ（彼の名はカヴァルカによれば、ニコライオとなり、ヴェネツィア本ではアルヴィゼとなつてゐる。』と。 *L'Irlanda è la vera patria degli asceti sognatori di*

ortidezze infernali, e ci dà le visioni più importanti. Prima è la diffusissima leggenda del pozzo di San Patrizio, di cui esistono in Italia tre o quattro redazioni Iddio aveva indicato a San Patrizio, perché se ne giovasse a diffondere la fede, un pozzo dal quale si entrava nel purgatorio; e in esso, tra gli altri, volle entrare un cavaliere Owen (diventato Nicolaio nel Cavalca, Alvisè in un testo veneto.))

この引用文の中に見出されるカヴァルカとは、ドメニコ・カヴァルカ Domenico Cavalca (一二七〇—一三四三) のことである。彼はピサの近郊ヴィコに生れ、ピサの聖カテリナ修道院で哲學と神學を學び、全生涯を殆んどその修道院で過ごした人であるが、彼のなした最大の貢獻は、内外の宗教文學をイタリア語に翻譯したことであろう。即ち上述の「聖パトリックの淨罪界の傳説」の外に「大グレゴリオの對話」も譯したが、彼がダンテと同時代であることから考えれば、その翻譯がダンテに重要な影響を及ぼしたと見られるのは當然であろう。しかも騎士オウエンは、彼の翻譯ではイタリア名のニコライオで呼ばれているくらい、これが當時はすっかりイタリアの物語となつていたと想像されるのだから。

ジンガレリは「神曲」は一種の倫理と教義を比喩的に描くために、材料として彼岸の世界をかりて來たのだと説くが、同時に中世の藝術と文學のいつさいが「神曲」の中に融和されると述べて、トラッカにくらべてダンテ以前の文學の影響をいっそう重要視している。

しかし、ジンガレリも「彼岸の世界の橋」とダンテの關係には觸れていないが、が、それを論じているものに、ブロシエ E. Blochet の「東方的源泉」 Les sources orientale de la Divine Comédie なる書物がある。いまその一節を眺めよう。『他の傳説には發見される「橋」も、キリスト教の地獄には全く無用である。それに反して、この「橋」はマッダの地獄では重要な役割を演じる。』 Le pont que l'on retrouvera dans d'autres légendes est complètement inutile dans l'enfer chrétien, tandis qu'il joue un très grand rôle dans l'enfer mazdaéen (p. 73).

更に彼は言葉をつづけている。『ダンテは地上と天國をつなぐのに、この橋を使おうと考えたとは思われない。それはその必要がなかったからである。なぜならば、「神曲」ではこの未知の世界の配置は、「聖ボールの下降」や「アルダ・ヴィラフの下降」とはおもむきを異にしている。即ち地獄は一大漏斗の形をなし、その下に一つの山があり、その山の山腹が淨罪界になつており、またその上に、天堂界が冠のごとく、かぶさつていのであるから、一つの世界から他の世界に移動する時「橋」は必要ないわけである』と。Il ne semble pas que Dante ait songé à se servir de ce pont conduisant de la terre au Paradis ; d'ailleurs il n'en avait pas besoin, car, dans la 'Divine Comédie, la disposition du monde invisible est toute autre que dans la Descente de saint Paul ou celle d'Arda Viraf. L'enfer est un immense entonnoir sous lequel se trouve une montagne dont les flancs sont le Purgatoire et qui est couronné par le Paradis ; il n'y a pas besoin de pont pour passer de l'un à l'autre (p. 75).

以上あげた三人のダンテ學者の説は、それぞれの相違點はもちつともなおかつ通説と考えられているにも拘らず私は、「神曲」のテキストに基いて、それを批判して見たいのである。

四

ダンテは地獄を九圈、淨罪界を九層、天堂界を九天に分け、地獄の長、ルチフェロを地獄の中心におくが、それは地上のエルサレムの直下にあたつており、淨罪山はまさにエルサレムの反対側の地球の他の半球に聳えることになつてゐる。

ダンテは聖地に近い荒原から出發して、地獄界、淨罪界、天堂界の三界を螺旋形をなした進路にしたがつて旅行し、再び地上に戻つた地點ははじめの出發した地點の反対側となつてゐる。そのあいだの遍歴において、私が地獄篇のみをとり

あげようとするのは「橋」はいままでに見たごとく、本来地獄のものだからである。

さて地獄篇の第一歌の終りから、第二歌の始めへのつながりと、第二歌の終りから、第三歌の始めへのつながりは、はなはだ不明瞭である。しかし第一歌は朝で始まり、ダンテがウエルギリウスとともに歩くうちに、第二歌はすでに夕方で、場所的にも不明で、第三歌では冒頭に突然地獄門が出現するが、そこにいたるまでの行程はまた説明されていない。

それは、その部分が「神曲」全體のすじと無関係であるばかりでなく、もしも地上から地獄への行程を詳らかにするならば、なにか空想的なものを用意せねばならなかつたからであろう。

さて第四歌の終りから、第五歌の始にかけて、地獄の第一圏より第二圏への下降を説明しているが、地獄は漏斗状をなした穴であるから、下降は容易である。また第二圏より第三圏への下降も、ダンテは殆んど語ることなく行つてゐる。が、第三圏から第四圏への下降については、第六歌の終りに次のように記されている。

「かの路をまるく廻り歩み行き、

その下へ降るところへたどりつきぬ、

ここにわれら大敵ブルートに逢いぬ。」(六・一二二—一二五)

しかしブルートも下降を妨げず、路も險しくない。やがてステイージェの沼に行きあたるが、これも攪ぎ手フレジアスの漕ぐ舟で渡ることができた。次にディーテの城の中に入り、崖のふちに出ると、下の見おろす岩に囲まれた中に三つの小さな獄がある。即ち第七、第八、第九の圏である。そのうちでも第七圏は三つの環に分れている。第七圏の降り口の説明としては、

「斷崖を降りんとてわれら來しは、

險しき上に、そこにいるもののため、

人みな目を逸すところなり。

トレントのこなたにありて、アディチエを

横に衝く、あの山崩か地震によりてか

支えたる力弱りしたためか、

そも、崩れはじめたる山の嶺より

野まで、岩は碎かれ、その上を

行く人に、路のたぐいそなえしに、

この谷の峽間の坂はさも似たり。」(七・一一二)

この崩れた断崖の下降は、今までよりはむずかしいが、「下へ行くわが足の下、常ならぬ荷によりて石はしばしば動いたり。」(七・二九—三〇)この程度の困難さで二人は低い地獄に降りた。

しかしすぐあとで注目すべきウエルギリウスの言葉がある。

「他の時、

わが低き地獄へ降りしころには、

この岩はいまだ壊れずありけるを。

されど思廻らせば、最高圏の

獲物をばディテより取戻せしかの君の

來りたまひし、少し前なりき。」(七・三四—三九)

これは、キリストが十字架で死に、つぎに、復活するまえに、ニコデモ傳にある如く、アダムをはじめイスラエルの族

長らを救出したことを示すものである。

第七圈から第八圈に降りるには、フレジエントンの飛瀑が下降を厄魔している。したがつて、ウェルギリウスとダンテは怪獸ジェリオネの背中にのつて下降することにした。怪獸は例によつて左へ向つて旋廻しながら下降したから、ダンテは右手に、フレジエントンの紅い流を見ることが出来た。

第八圈は一名「惡の袋」と呼ばれ、鐵色の石でできている。この廣野の中に大きな深い穴があいており、この穴と斷崖の裾とのあいだ、残る一帯は環狀で、その底は十の溪に分かたれている。これらの溪は城を護る幾重にも廻らされた濠にも似ている。そしてこのような城には城門から外濠にたどりつくのに、いくつもの小さな橋がかかっているように、斷崖の裾からのびた岩石の根元が、橋脚となつている岩橋が十の溪を貫いて、それらは四方からみな中央に向つて集り、その穴の間ぎわで終つてゐる。その恰好は車の輻が軸にあつまつてゐるようだ。

二人は右手に第一のポルジャ囊をみながら、左へ左へと歩をすすめた。囊の内側には罪人たちが二つの集團をなして各々反對方向へと歩いているが、惡魔が咎をもつて時々かれらを打つ。そこでわれわれは次の如き説明を見る。

「かくて後、數歩ならずして到りしは、

斷崖の岩突出したるところなり。

かるがるとわれらはこれをよじ登り、

ここに、その岩橋の上を右え向い、

永劫のこの圈より立ちさりぬ。」(十八・六八―七二)

即ち二人はさきに「惡の袋」の外邊の堤の上を左へ進み、ここで、その中を縦斷する岩橋を通るために、右へ折れたのである。またこの岩橋の下は穹窿形に開いて、そこを罪人が通行するようになつてゐる。(十八・七三―七四)

やがてわれらは次のような説明を見る。

「はや、既に窄き徑第二の土手に

交りて、その次の穹窿門の

迫持となれる所にわれらはつきぬ」(十八・二〇〇—二〇三)

これは第一の袋と第二の袋をへだてる岩壁の附近の光景であるが、更に次のごとき説明がある。

「溪の底は岩橋いと高き穹窿の

尾根の背に登らずんば、いずこよりも

見ること得難きほど深みたり。」(十八・二〇九—二二)

これで分るように、岩橋はアーチ形をなしている。

次の岩橋の頂上から見おろすと、第三のボルジャ囊は濛の真中にみえる。壕の中の鉛色の岩床の上に、まるい同じ大きさの穴がいくつかあいている。二人は第四の土手から左手に降り、この穴だらけの岩床の近くに行つた。ここで、ウェルギリウスはダンテを元氣つけるために抱擁したが、そのままダンテを抱えて今降りて來た道をのぼり、第四、第五の土手にたどりつき、その穹窿の頂上で彼を降ろした。

この附近の説明としては、次の言葉がある。

「しずやかに、岩道はあらく切り立ちて、

山羊さえも、行きなやむやむべき道なれば、

ここよりぞ、われに開けつ次の溪。」(十九・二三—二三)

第五の囊に行く條りは次のごとく記している。

「かくてわが「神曲」によむをこのまぬ

その他のことを語りて、橋から橋へ

われら行き、その頂にたちしとき

足をとめぬ。「悪の袋」の次の裂目と

かいもなき次の歎を見るために。」(三十一・一一五)

どろどろの粘つこい大釜の瀝青、それは冬の日にヴェネツィア人がドックの中の船體を塗りかえるために竈の火にかけ
るのだが、いまの下では火によらない神技による瀝青が煮え、岩床のあらゆるくぼみにそれが満ちている。

その時一匹の悪魔が岩橋の上を驅けてきて、罪人を岩橋の下に投降した。やがて悪魔たちは二人にも敵意を示し、そこ
に天使が現われて、悪魔らを叱責するが、その時一匹の悪魔マラコーダは次の如く云う。

「この岩道を

なを遠く行きがたし。そは第六の

穹窿は粉々となり、底にあり。

なを先へ行かんとなれば、この崖の

上を汝らは傳うほかなし。

まじかに道をなす他の岩あり。

昨日、この時刻より五刻の後、

ここにこの道の碎かりしより

千二百六十六年の年は満ちぬ。

そこへわれ、これらわが部下の中より

身を乾かせる者ありやを見に送る。

これと行け、かれらは害を加へざるべし。」(三十一・一〇六一二七)

「前に出よ、アリキノ、カルカブリーナ」

彼は云いたり「更にカニヤツツオ、

バルバリツチャ、汝は十人を率いて行け

汝も行け、リビコツコ、ドラギニヤツツオ、

牙のあるテリヤット、・グフィカーネ、

ファルフアレロ、怒に狂うルビカンテ。

煮えたぎる糲のあたりをしらべ、

完全に窟の上につづきたる

他の岩へこれらのものを守り行け。」(三十一・一一八一二六)

ダンテとウエルギリウスは第五袋と第六袋を分つ土手に立つている時、頭株の悪魔マラコーダの云うのは、この岩橋は
砕け落ちて渡ることができないから、崖づたいに、第六の袋へ行くほかは道がない。そこには岩橋があると。しかしこの
言葉は、偽言であることがあとで分る。またここに正確な數字を述べるのは、マラコーダがウエルギリウスを欺く手段で
あつた。それによると、地獄の岩橋が落ちたのは、キリストが十字架上の死を遂げたときである。それが、この日から一
二六六年と一日に五刻を餘す以前であつたという。ダンテの饗宴篇、第四篇、第二十三章によれば、ダンテはキリストが
三十四歳の時死んだと考えていたのだから、一二六六年に三十四年を加えると一三〇〇年になる。教會暦のこの日はキリ

ストの最後の日、即ち聖金曜日翌日であるから、復活祭の前夜にあたる。ダンテはキリストが息を引きとつた時刻を正午と考えていたから（饗宴篇、第四篇、第二十三章）、正午、即ち十二時から五時間をひきさると、午前七時となり、ダンテがこについたのは一三〇〇年の復活祭の前日の午前七時ということになる。

しかし、ダンテとウエルギリウスは、悪魔たちの後に従つて左手の土手へと迂廻した。

第二十二歌の終りまでは、ウエルギリウスとダンテは悪魔たちと行をともししたが、最後にわれわれは次の言葉をみる。「われわれもまた、かく騒がしき者より去りぬ」（二十二・二五二）

ここで二人は悪魔の一行より分れることができた。

第二十三歌のはじめ、ウエルギリウスとダンテの二人だけ沈黙の歩みをつづけているが、後から悪魔マーレブランケが追つて来るのを見て、ウエルギリウスはダンテを抱き、右手の崖を滑り落ちて第六の袋へ達つすることができた（二十三・四五）。

やがて、そこにいる罪人に、下へ降る道をきくと、さつきの悪魔の言葉は嘘で、その岩橋は多少こわれていても、その上を歩くことができることが分つた（二十三・二三八）。

ついで二人は破岩を傳つて土手を登つた。破岩は揺れ、いつ崩れるか分らなかつた（二十四・四〇―四五）。それから岩橋に沿つて、狭い、けわしい徑をたどり、岩橋の端、第八の岩橋のつらなつているところから、下りて第七の袋^{ボルジヤ}についた。

そしてさきほど降りたところをあがつて、岩橋の岩また岩の淋しい徑をたどると、眼下に第八の袋がみえてきたが（二十六・三三）その第八の袋にも、次の第九の袋にも無事におりることができた。この袋の周囲は二十二哩である（二十九・九）。因に第十袋のそれは十一哩であつた。さてここへついた時刻は、『月、既にわれらの足下にあり。』（二十九・一〇）という言葉から想像して、正午であつたと知る（なぜなら、月は夕暮に地平線にあらわれ、眞夜中に中天にたつし、翌日の正午に天底にいくか

ら、地球の中心に近いところにいる者にとつては、そのように見えるのである。）。ダンテの地獄遊行は全部で二十四時間乃至二十五時間であるから、餘すところ五時間であつた。やがて彼等は第八の獄の最後の袋である、第十の袋の眞上にきたが、つづいてこの上を廻る土手の上を歩き、下半身を井戸の中に入れられている巨人のいる第九の獄についた。巨人、アテオは兩手でダンテをすくい、腰まで氷に閉められている地獄の首領ルチフェエロのいる地獄の底コチートへおろした（三十一・一四二）。

さて最後に、ウエルギリウスとダンテが地獄を出るときの状況を眺めよう。

ウエルギリウスはダンテを背負つたまま、ルチフェエロの翼にとびつき、ルチフェエロの體にそつて下降しつつ、腰の邊へきたとき『股の根が脇腹の太きあたりを廻りたる、まさにその所にわれらありし時……』（三十四・七六―七八）身を一廻轉させて、頭を下にむけて、ルチフェエロの足の方へ、よじ登るように降りていつた。ダンテはまた地獄に戻るのかと思つたが、重力の中心であるルチフェエロの體の中心部を、ウエルギリウスが體を逆にしたとき、すでに過ぎていたのに、ダンテは氣がつかなくつたのである。かくて、上半身は北半球にあるが、足はすでに南半球にあるルチフェエロの體を傳いながら、氷と體のあいだを通つて無事に地上へ通じる抜道へ出た。この通の南半球の地表までの距離は、北半球の表面から地獄の底までと同じである。かれらはこの抜道を通つて、地表へ出た（三十四・七九―三一九）。

さて地獄からのこの出口は淨罪丘の東の麓にあつた（淨罪界、一・一二）。

さて以上のごとく、ダンテの地獄旅行の行程をしらべた結果、アヴェスタに現われる形態でのキンヴァド橋は、ついに發見することはできなかった。しかし、この「彼岸の世界の橋」そのものが西へ傳播するときに、多く變形、修飾されたことは前に述べた。たとえば、「アダムナンの幻想録」では、すでに幅の伸縮にいろいろの限度ができ、「エマーの結婚」では、高さや幅は一定で、橋自體が運動するようになり、「アルベリコの幻想録」では本來の形をとりもどすが、「ター

ンデルの幻想録」ではただ狭い長い橋となり、「聖バトリックの淨罪界の傳説」ではただたんに狭いうえに滑りやすくなっている。「ターチルの幻想録」では棘のある橋であり、聖フランチェスコの「小さい花」では弱く、狭く、滑りやすくなっていたので、途中から空中へ飛翔するほかなかった。

しからば「神曲」の地獄篇においても、これらの橋の變形が存在するといひ得ないであろうか。第八圈の「惡の袋」^{ホルジヤ}の十の溪にかかつている岩橋が、まさしくそれである。この岩橋は下が穹窿形にひらいていて、その下を罪人が通ることのできる橋である（十八・七三—七四）。またこの岩橋の形は穹窿の尾根の頂上に登れば、他の場所からはみえないものも見えたと記してあるから（十八・一〇九—一一二）橋の形は急カーブをした弓形であることが想像される。

さらにまた『岩道はあらく、切りたちて、山羊さえも行きなやむべき道』（十九・一三二—一三三）とあるから、この橋は、狭く、險しく、滑りやすいことも想像できる。そしてダンテが地獄篇の中で、この岩橋について説明しているのは、主として第八圈の描寫であるが、（その下降は比較的容易である）それは第十八歌から第二十六歌まで九歌にわたつて、のべられている。そしてその分量は地獄篇全體の約四分の一弱である。これによつても、如何にダンテの頭の中には、「彼岸の世界の橋」の觀想が重要なモチーフとして存在していたかを知ることができるであろう。

しかし、ある論者はいかにも知れない。キンヴァド橋のモチーフ及びその傳統が最も重要な意味は、それが地獄と他の世界（多くの場合、淨罪界）とを繋ぐ、あるいは隔てることであると。ではこの意味での「橋」はダンテの「神曲」にはないであろうか。（淨罪界の階段の登攀は、ヘブライ文學の梯のモチーフの發展として、區別すべきものである。）

私は多少奇妙な「橋」ではあるが、地獄篇の最後の歌、第三十四歌のルチフェロの體を一種の「橋」とみなすことも可能ではないかと思うのである。何故ならば、それは惡魔の首領ルチフェロの體の一部というよりは、むしろ「もつれた毛房のついた橋」ⁱⁿで（すでに硝子の橋のあることをわれわれは知つてゐる。）また地獄から淨罪界へ出る唯一の通路と考えることも

できるから。そしてこの「橋」は兇惡な惡魔の體であるから、いうまでもなく危険極りないものであり、その羽毛の房はすべり易く、ウェルギリウスさえも、それを傳つた時、疲れ憊んだほどであつた。(三十四・七八)このように考えて見れば、「彼岸の橋」は少くとも「地獄篇」のダンテにはつねに潜在意識としてあつたので、終にルチフェロの體によつて巨大な怖ろしい「橋」を描いたとするのは、あながち荒唐無稽な觀察といわれまいであらうと信ずる。(完)

略註

- (1) われわれはホメロスの「オデュッセイア」第十一歌の各所に、プラトンの對話篇「ゴルギアス」(五二四a)、「共和國」第十卷、ウェルギリウスの「アエネーイス」第六卷、プリニウスの「自然の歴史」第七卷、五二「メタモルフォーセス」の各所に彼岸の世界の敘述をみるが、それらはいずれも挿話的存在で、本論ではない。
- (2) Zend-Avesta, Part I, Vendidad, Fargard XIX, 29-30 (trans. by Darm-esteter, Sacred Books of the East, XXIII, pp. 215-216) Anda Vrat, chs. IV-V.
後期ヘルシア文學に關しては、Chanyud Pul などの「橋」が現われるが、それは髮毛より細く、剃刀よりも鋭いと記してあるが、尙詳細は左の文獻參照。
D. Shea and A. Troyer, The Dabistan of School of Manners, I, pp. 285 ff.; Alger, The Destiny of the Soul. A Critical History of the Doctrine of the Future Life, pp. 136 ff.; Mills, Avesta Eschatology Compared with the Books of Daniel and Revelations, pp. 47, 48 ff.; Miguel Asin Palacios, La Escatologia Musulmana en la Divina Comedia p. 151 (Fotuhat, iii, 573) アシン・アラシオスは回教文學の彼岸の世界の橋はヘルシアの末世論に現われるものからの借用だと云つてゐる。
- (3) Trans. E. W. Lane, The Thousand and One Nights, II, p. 418.
- (4) Meyer, The Voyage of Bran, pp. 2-35; Cross and Sluwer, Ancient Irish Tales, pp. 588 ff. Boswell; Irish Precursor of Dante, pp. 150 ff.
- (5) Whitley Stokes, Rev. Celtique, IX (1888) pp. 447-495; X (1889) pp. 50-95.
- (6) C. S. Boswell, An Irish Precursor of Dante; Windisch, Irische Texte I, pp. 167 ff.
- (7) Ériu, III (1907), pp. 105 ff.
- (8) Francesco Cancellieri, Osservazione intorno alla questione promossa dal Giuliano di Costanzo sopra l'originalità della Divina Commedia di Dante, pp. 132-207.
- (9) A. Wagner, Visio Tugdalii Lateinisch und Altdentsch; V. II. Friedel and Kuno Meyer, La Vision de Tondale.
- (10) C. M. Van der Zanden, Étude sur le Purgatoire de Saint Patrice. Cf. T. A. Jenkins, The Espurgatoire Saint Patriz of Marie de France (Investigation Representing the Departments of Romance Languages, etc., 1st series vol. VII. Decennial Publ.)
- (11) ターナル Turchill の代り Thurkel と誤つてラベタストとある。

Roger of Wendover, Chronica, siue Flores Historiarum, ed. H. O. Coxe,

vol. III pp. 199ff.

- (2) Knut Liestøl, *Draunkvæde*, p. 17.
- (3) Silverstein (*Visio Sancti Pauli*, p. 77) compares a Moslem version.
- (11) T. Silverstein, *Visio Sancti Pauli*; H. Brandes, *Visio Sancti Pauli*, *Ein Beitrag zur Visionsliteratur*.
- (9) Gregoire de Tours, *Histoire des Franks*, ed. H. Omont and G. Collon new ed. by R. Poupardin, pp. 254-255; *History of the Franks* by Gregory Bishop of Tours, *Selections*, Translated with Notes, by Ernest Brehaut, pp. 168-171.
- (9) Paolo Salatiel: *I Fiori di San Francesco e il Cantico del Sole*, Ca-

pitulo XXVI.

- (17) Santa Caterina da Siena, *Lettere della Divina Dottrina volgarmente detta Dialogo*, etc. ed. Matilde Fiorilli, pp. 43ff.
- (18) 聖カタリーナは「聖ガールガノの幻想録」を読んだにちがいないと思われふしがある。
- (16) かの翼ひろく開ける折を見て、
毛むくたつ脇にとりつきたまいぬ。
かくて後、房より房へ、もつれたる毛と氷りたる殻の間を降ろせ給う
(神曲地獄篇三十四・七二―七五)